

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	文化のため : 部報
Author(s)	田部, 健
Citation	龍南, 243 : 93 - 96
Issue date	1939-03-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7533
Right	

部 報

文化のため

田 部 健 記

私達の演説部として、又讀書會員としての、一年間の仕事は終つた。今は後から來る人達に總てを護るべき時である。

私達が五高に於ける批評精神の衰退に深い不滿を抱き、何んとかこの沈滞を打破る企てを爲さねばならぬと考へ、雜誌部と提携し、有志の人々の援助を得て、動き始めたのは六月に入つてからであつた。計畫した事の抽象性が次々に明かになり、曲折と變貌とを重ねて、動かうとし、動かさうと努めて來た、この一年間は、私達の心に尊い記録として残つてゐる。今私の心にあるものは、「やれば出来る」と云ふ自信である。

文化行事について、又讀者會について、少し報告、私見を述べてみたい。

× × ×

演説部として今年新しく行つたものに座談會と、大澤九大教授の招聘講演會がある。前者は、第一學期に二回、雜誌部、總務部と提携して行つた。一部の人々の會でなく、廣く色々なグループの人々に來てもらつて、發刺たるものを持たうとした。手初めとしては充分な意義があつたと思ふ。殊に第一回の座談會の時の、龍南文化衰退への不滿は激しいものがあつた。近頃盛んな胎動をみせてゐる五高生を介ながら、その情熱が漸く具体化してきたのであらうか、と考へてみる。

座談會は非常に難しい行事である。下手をするとき間の浪費に墮る事になる。司會者は勿論の事、参加者は充分の準備をし、その場で座談が圓滑に運ぶ様に努力しなければならぬ。

大澤教授の講演會は、田舎に居て、ともすれば安易な氣持になる、吾々へ一つの刺戟を與へんとしたものである。

先生の情熱にふれ得た人は、その意義を悟つて下さるで

あらう。

演説部の中心事業たる、辯論大會が不振を數かれるのは久しい事であつた。これは實に辯論内容の空想から來るものである。私達は出演者を多くする事よりも、内容のあるものを行ひたいと心掛けた。あまり出場の勸説をしなかつたのだ。この態度は正しかつた。秋の會には聴衆七、八十名を得、張氣のある會を行へたのである。辯論は身振りや、技術ではないのである。眞摯な研究の成果、眞情を込めた絶叫を以て、參加して欲しい。又自ら進んで出場する者の少い事は實に殘念である。苟も私見ある人は、これを發表して批判を求め、一層の研鑽をすべきであると思ふがどうであらう。

秋の會後には座談會を開き「新日本文化の方向」「學生は何を爲すべきか」を論じた。竹下教授から種々有益な話をきき、一應散會した後も、又集つて話し続けると云ふ風であつた。

演説部として格別新しい仕事を爲した譯ではない。たゞ文化部としての使命を良心的に、少しでも果して行きたいと努力した事は自信してゐる。

この他に、二學期には、二つの連續文化講義を、行ふつもりであつたが、果し得なかつたのは非常に殘念である。五高生は本來全部が部員なのであるから、積極的に委員を鞭撻し、活潑な動きを示してもらひたいものと思ふ。

× × ×

讀書會について知らぬ人が多いと思ふから説明させて貰ふ。讀書會は去年の六月生れた。十名程で竹内先生のお宅に集りデイルタイを讀んだ。二學期から會員を募集し、同窓會館二階を借り、金曜定會と定められた。

今迄に「哲學通論」「カントとゲエテ」「自由主義とヒューマニズム」「人間の世界」を讀んだ。今は「人間の學としての倫理學」を讀んでゐる。考へる事を愛し、語る人を愛する人に參加してもらひたい。

勿論明確な主義主張を持たぬ者の集りであるが、この色々な點で、困難な時代には、段階として最も適當なものと思ふ。

讀書會は哲學のみに關する會ではない。廣く讀書の興味を刺戟し、精神總動員を行ふためのものである。初め作る時は、私一個は途方もない大きな事を考へてゐたが、今は

段階として堅實に利用され、ばよいと願つてゐる。一般の協力援助をお願ひする。

× × ×

何等か社會的行爲に出ると云ふ事は實に難しい事である。社會的行動の経験がないために、心理的に躊躇を感じ、判定は宙に浮き、計畫は具体性を失ひ勝ちである。けれどもそれを矯正し、適確な行動を爲し得る様になるためには、その不安定を一度通り克服しなければならぬ。行動するのに不安を感じてゐる人は、自己の性格に逃げ込みだりせず「先づ動いて」欲しい。

龍南文化の頽廢が叫ばれる事は久しい。しかしそれに對する積極的な對策、執拗な行動の意志は現れなかつた。私達は指摘や詠嘆には満足出来なかつたのだ。現實への冷笑を私達は憎まねばならぬ。私達は創造的、藝術的教養を持ち、積極的な態度をとらねばならぬと思ふ。勿論文化運動があると云ふ事が第一義ではない。しかし今迄の文化運動のなさは、文明的教養の深い人の「文化運動への無關心」と云ふ様なものではなかつたと思ふ。

現在批評精神は激しい變貌を経験しつつある。この劃期

的な時代に、吾々自身の思索の成果を交換し、互に切磋琢磨するための機關が必要である。そして、一方、それによる學生大衆への啓蒙が必要である。吾々は切實な要求からこれを作つた。あとは、これを利用する事である。

文化運動と云ふものを、口喧しい人間の集りと思ひ、映畫や小説の批評に終始する會と思ひ、或ひは又、哲學的用語によつて判らぬ事を判つた様な顔をして話す人間の集りだと輕蔑してゐる人が居るかも知れぬ。確かに一頃さうした傾向があつたと思はれるが、今は違ふ。人間を思ひ、生活を設計し、天下國家を思ふ事である。

好意的な眼を以てみてほしい。

× × ×

今新刊書籍の講讀會が幾つか出来てゐるが、これを合併して生徒文庫の様なものを作つてはどうであらう。

經濟的に非常に有利であり、圖書館の購入せぬ様な書籍を廣く讀む便宜が出来ると助かると思ふ。高物價の折柄、こうした所から學生消費組合が成長すべきだ。

これは私の一つの意見である。この機會に發表して參考としたい。

× × ×
 春期辯論大會

劍道部々報

一、吾が社會組織と文化の方向

文三甲三 秋田 博正

二、所感

文三乙 松岡 卓

一、感想

文一甲二 末武 武夫

一、部生活

文三甲一 池口 敏郎

一、高校生活の反省

文三乙 久保 政

一、自由主義と自我

理二乙 瀬上 安正

一、言語の世界

文三甲三 中原 信吉

秋季 大會

一、感想

理一乙 田代 友僊

一、自由と課題

文三乙 弘津 正二

一、情熱の缺亡

文三甲一 田部 健

一、新日本文化の方向

文二 中島 信之

一、草莽の青年の心

文三乙 脇島 稔治

三高辯論大會

一、革新

文三乙 久保 政

一、方向

文二乙 中島 信之

我劍道部の過去十二年の歴史は慘澹たる敗北の血涙史であつた。幾度か紫紺の大旗は我等が手に歸せんとしては又遠いて行つた。

殊に昭和三年と昭和十一年の二度は共に共に優勝戦に臨み大將同志の一本一本に迄至り、我も人も共に優勝を許し乍らも一步の差にて長蛇を逸した恨みは今尚吾等が胸奥に新なる所である。

四年世紀の歳を持つ京大主催全國高專劍道大會に於て吾々の先人は最も輝しい歴史を残して呉れた。第一回、第三回、第六回と殆んど全國群雄中比を見ざる意氣と傳統とによつて全國制覇を完うし、最後に大正十五年第十四回大會にて四度び凱歌を肥後の天地に響かせた。

そして「五度び制覇」——之がその時以來、濟美館裏に衆ふ若人の常に變らざる目標となつた。

だが来る年も来る年も雄圖は空しく破れ、加茂川邊の星月夜に、悲憤の誓ひを新に固めるのみだつた。「四度び勝ち得し優勝の榮光去りて幾歳ぞ、」雪辱行を唱して進む部